

(第3種郵便物認可)



損失障害の女性受刑者の対応についてミーティングする滝井正人医師（右奥）と職員ら＝北九州市小倉南区の北九州医療刑務所で10月

2020年10月、記者は
北九州医療刑務所（北九州
市）の許可を得て、摂食障
害の治療を受けていた30代
の女性受刑者に施設内で話
を聞いた。

ヨガインストラクターなどやりたい仕事ができるようになって、体重も少しずつ戻っていった。

しかし、27歳で結婚してから食べ吐きの症状がお出でにならなかった。引き金は夫の家庭内暴力だった。仕事も辞めさせられ、存在を否定され続けた。「負の感情を食事の中に詰めこんで口の中に押し込み、それを吐いてスカ

「ソトする」を繰り返した。
結婚生活は2年で終わつた。長女を引き取り、実家で再出発しようとしたが将来の両親の介護やシングルマザーとして生計を立てられるかが不安になった。衝動的に化粧品を万引きしてきた。食べ吐きの症状も止めた。

みが生じ、自力での回復は難しい。個別面談を重ね、自身の問題に向き合う段階に入った患者には集団ミーティングに参加させる。治療の進み具合によって入浴や運動などの制限が解除されていく行動療法で、心の成長を促し、自己管理力を育成できるよう支援する。

の内面を理解してくれ
闇の存在が必要だと困
治療を受けて女性はそ
じでいる。一方で「今
ちを出所後も維持でき

「事者正直不安です」とも話した。
れる周 瀧井医師は「ここは最高の治療環境がそろう最後の
う感 とりで。ゆがんだ考え方を
り気持 直さない限り、再犯の可能
るか 性は捨てきれない。治療が

終わらないで、受刑者を見るが氣持ちになるが、い医療刑務所にいる。者が少くない

に出所する時は残念、それでは難しい」と話す。

ターネーを対応するは万田に撞回で、は学校ユニバーシティであるら患てそ

厚労省は「4か所」だけでは心でない、求めていくべきだ。支援セイ、増設するを計上。

は全ての相談に「いい」と体制強化する。

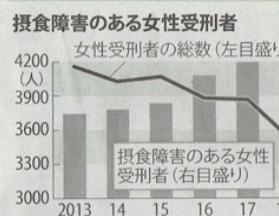
心のゆがみ面談治療

檢証

女性受刑者の中に拒食や過食などの症状がある「拒食障害」の受刑者が増加傾向にあることが、法務省の調査から見えてきた。再犯防止に取り組む医療刑務所内の治療はどう進められているのか。そして、矯正外での治療や支援の課題は何か。女性特有の精神疾患といわれる摂食障害を取り巻く今を取材した。

現在、一般刑務所での処遇が困難な20～70歳代の授食障害の受刑者が8人収容され、独自の治療プログラムを受けている。

摂食障害者の再犯防げ



摂食障害のある女性受刑者

1990年代は急増し、2001年度に全国の医療機関を受診した患者は21万321人。2人に上つたと推計されて

出所後の支援に課題



所 ゆきよし

摂食障害の治療に詳しい
西園マーハ文・明治学院大
教授（精神医学）は「患者が
増加の背景には『やせてき
れいになりたい』という外
見の問題だけでなく、女性の
社会参画が進む中でのさ
まざまなストレスや対人関
係の葛藤がきっかけになる

そこで、岡山市立病院では、内科ではそれそれで優れる治療方法が異なる」と摘要する。そこで、岡山市立病院は、14年度、治療機関についてどの医療機関にすべきか分かれなくていいのが実情で、九州大病院（岡山市）心療内科の高倉義師は「内科・精神科・心内科ではそれぞれ優れる治療方法がある」と摘要する。

いる。一方、万引きなどを繰り返した受刑者は適切な治療が受けられないまま症状が慢性化したケースが多く、いつみられ、損傷の受刑者の増加は「城の外」の治療支援体制が抱える課題を映しているとも言え

現時点でも明確な治療法はないが、カウンセリングや集団療法、行動療法などを組み合わせた医師や臨床心理士、栄養士によるチーム医療が効果を上げるといっている。しかし、当直

「正直不安です」とも話した。
滝井医師は「ここは最高の治療環境がそろう。最後のとりで。やがんだ考え方を直さない限り、再犯の可能性は捨てきれない。治療が

終わらないうちに派出所で受刑者を見送る時は残念な気持ちになるが、それぐらい医療刑務所には難しい「者が少くない」と話している。

食障害全国基幹センターを設置。15～17年には宮城、静岡、福岡、千葉4県に治療支援センターを整備し相談対応や医療機関への紹介を担うようになった。

福岡の支援センターがおこなう九州大病院の心療内科では、院内の専門医が県内の総合病院や精神科病院に赴き、医師や看護師ら向けに講習会を開催している。症例や治療法を説明し、撮影した障害を診断できる病院は、岡山県内で20施設以上に増えた。しかし、高倉医師は